
 その他

山田原欽「古畑別業記」訳注

鎌田 出*1

[はじめに]

本訳注は、阿川毛利本家毛利忠氏所蔵の卷子本「古畑別業記」の訳注である。

「古畑別業記」は、現存する山田原欽の文集である『復軒文藁』及び『復軒先生遺稿』^{註1)} いずれにも未所収の新資料であるが、『復軒文藁』に所収される「就方上野別墅記」(以下、「別墅記」と同内容で、共に阿川毛利三代当主毛利就方の上野古畑(現在の山口県萩市椿東中津江)別業(別墅)からの眺望を記す。両者を比較すると、「古畑別業記」の記述がより詳細である。

『復軒文藁』には、やはり毛利就方の別業について記した「毛就方亭記」が所収される。「古畑別業記」と「別墅記」が貞享元(1684)年9月作成であるのに対して、こちらは題下に「同年(※貞享元年)七月十二日夜坐間把筆」の自注があり、作成時期が約2ヵ月遡る。「毛就方亭記」の分量は「古畑別業記」の半分にも満たず、「坐間(短い時間)」で作成された古畑別業の概況を記す一文である。

[凡例]

- 一、本文は手稿本であり、訳注作成に当たり全て新漢字に改めた。引用文も原則として新漢字を用いた。ただし、絵図における表記等一部原文の表記をそのまま用いたものがある。また、「余・餘」、「弁・辨」など誤読の恐れのある場合は、必要に応じて旧字を用いた。
- 二、異体字は原則として全て新漢字に改め、必要に応じて注記を加えた。
- 三、誤字・誤用と思われるものは、訂正の上注記を加えた。
- 四、字音及び訓読は、原則として現代かなづかいと

した。但し、和書及び絵図からの引用は原文表記をそのまま踏襲した。

五、文中の(※)は、訳注者による西暦表示等の補足説明を示す。

六、訳注の構成は、本文(ゴシック体)を示した上で、①書き下し文、②注釈、③現代語訳の順とした。

長城之東南皆有山焉。而傑出其間者独上野也。

①長城の東南皆山有り。而して其の間に傑出するは独り上野なり。

②「長城」…萩を言う。原欽「桂就定別墅記」(天和2(1682)年作)に「桂就定丈人之別墅在長州城外南山之側(桂就定丈人の別墅は長州城外南山の側に在り)」とあり、また「毛就直玉江別業記」(貞享2(1685)年作)に「玉江之山水長城之一致也(玉江の山水は長城の一致なり)」とあり、「長州城」すなわち「長州藩の城下・萩城下」の意で用いられている。

「上野」…地名。萩市大字椿東上野。現在の「上野」は、船津及び椎原の南に位置し、田床山入口辺りを南限とする。「萩城下町絵図(延享元年～四年)」^{註2)}には、現在の県道67号と田床山より流れ下る小川との交差する辺りに「上野」と記されている。

③萩城下の東南はすべて山である。その中では上野が傑出している。

凡長之右族皆有別墅焉。上野之中、谷広而土肥、樹深而泉冽。其最勝者古畑也。工部郎毛利就方君居焉。

①凡そ長の右族皆別墅有り。上野の中、谷広くして

*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

土肥え、樹深くして泉冽たり。其の最も勝る者は古畑なり。工部郎毛利就方君焉に居す。

- ②「長之右族」…「右族」は名門の家柄。『周書』(巻39「王子直列伝」)に「王子直字孝正。京兆杜陵人也。世為郡右族矣(王子直字は孝正。京兆杜陵の人なり。世郡の右族と為す)」とある。「長」は「長城」の略で、「長州・萩」を言う。長州(萩)の名家。

「別墅」…「別業」に同じ。別荘、別邸を言う。「樹」…原文は左が木の下に豆、右が寸。「樹」の通用字。

「冽」…泉の水の冷たさを言う。

「古畑」…地名。現在は「上野」ではなく「中津江一区」に属す。「地下上申絵図」^{註3)}の「椿西分」に、上野から松本川沿いの小道を川上に遡った所に「古畑」の名が見え、近くに拝領地であることを示す記号(○)と「毛利宇右衛門」の名が記されている。宇右衛門は、阿川毛利四代当主の毛利就泰。

「工部郎毛利就方」…「工部郎」は「工部員外郎」の略称で、宮内少輔の唐名。毛利就方は、寛永16(1639)年に宮内少輔に任ぜられている。

- ③おしなべて萩の名家は皆別邸を持っている。上野は、谷が広く土地も肥沃で、樹木が深く生茂り泉の水は冷たい。最も素晴らしいのは古畑である。宮内少輔であらせられた毛利就方殿はここに住まわれている。

作亭於其麓、枕山臨水。隱々可觀者、率皆觀焉亭焉而表焉。

- ①亭を其の麓に作り、山に枕して水に臨む。隠隠として観る可き者は、率ね皆焉に觀て焉に亭りて焉に表る。
- ②「枕山」…山に臨む。「枕」は「臨水」の「臨」に同じで「のぞむ・ほりする」意。宋・劉一止「縦雲台記」(『荅溪集』巻22)に「県治枕

山、山巋然(県治は山に枕して、山は巋然たり)」とある。

「隱々」…盛んである様。古畑別業の壮大さを言う。原欽「坪井氏亭記」(延宝8(1680)年)に「物華之隱々可以消日(物華の隱々として以て日を消す可し)」とある。

- ③あずまやを古畑の山の裾野に作り、山と川に臨む。壮大で観るに値するものは、ほぼ全てがここに留まり現れる。

有清嘯亭跨于寥廓、其太高敞之地也。

- ①清嘯亭の寥廓を跨ゆる有り、其れ太だ高敞の地なり。
- ②「清嘯亭」…古畑別業にあった亭の名か。「清嘯」は、『六臣註文選』(巻18)に載せる西晋・成公綏「嘯賦」の李周翰の注に「清嘯超越舜禹堯之妙楽(清嘯は舜禹堯の妙楽を超越す)」とある。「寥廓」…広遠な空。宋・洪興祖『楚辭補注』(巻5「遠遊」)に「下崢嶸無地兮、上寥廓而無天(下崢嶸として地無く、上寥廓として天無し)」とあり、顔師古の注に「寥廓広遠也(寥廓は広遠なり)」とある。「高敞」…高く広い様。
- ③清嘯亭は広遠な空を凌ぐ、実に高く広々とした場所である。

有聽風、齋風可聽也。不翹取之於茶話。抑思極耳目之所觸、至于聽風則其妙幽矣。

- ①風を聴く有り、齋風は聴く可きなり。翹に之を茶話に取るのみならず。抑耳目の触るる所を極めんとせば、風を聴くに至れば則ち其れ妙幽たり。
- ②「齋風」…未詳。「毛就方亭記」に「傲舞雩之風也(舞雩の風に倣うなり)」とあるのを踏襲するものと思われる。「舞雩之風」は、『論語』(先進第十一)に載せる曾皙の「風乎舞雩」に由

来し、人生の楽しみを言う。金谷治氏は「雨乞いに舞う台のあたりで涼みをして」^{註4)}と訳す。舞雩の台に吹く風。

「翅」…限定の副詞。「～であるばかりでなく」。
「茶話」…お茶を飲みながらする他愛のない話。

③風の音が聞こえるが、舞雩の台に吹く風は聞くべきものである。茶飲み話に取り上げるだけのものではない。そもそも耳や目に触れる全てを極め尽くそうと思っていたので、風の音を聞いて素晴らしく奥深い心地である。

有一亭於其下、茶事間憇焉之處也。有自怡館起乎側巖、亦可愛也。凡此諸亭、愈倚愈壯。徧玩為佳。

①其の下に一亭有り、茶事の間焉に憩うの処なり。自怡館の側巖に起こる有り、亦た愛す可きなり。凡そ此の諸亭、愈倚にして愈壯たり。^{あまむ}徧く玩しみて佳と為す。

②「自怡館」…「清嘯亭」同様古畑別業にあった亭の名か。「自怡」は自らの心を楽しませること。杜甫「独酌」詩（清・仇兆鰲『杜詩詳註』巻10）に「薄劣慚真隱、幽偏得自怡（薄劣真隱に慚じ、幽偏自ら^{たの}しむを得）」とある。「館」はもと異体字の「館」に作る。「愈倚愈壯」…「愈～愈～」は程度が累進的に増すことを表す構文。「倚」は「奇」に通じ、「珍しい・不思議である」の意。

③清嘯亭の下にあずまやがあり、お茶を飲む間ここで休む。自怡館は切り立った崖の傍らにあって、これも愛でるべきである。なべてこれらのあずまやは、珍しくあればあるほど立派である。すべてを楽しんでよしとする。

而且春桜献其新、夏岫流其翠、薜月揚明於秋、松雪掲白於冬。四時之情態不同。

①而も且つ春の桜は其の新を献じ、夏の岫^{みね}は其の翠を流し、薜^{かづら}の月は明を秋に掲げ、松の雪は白を冬

に掲ぐ。四時の情態同じからず。

②「岫」…連なる山々。みね。

「薜月」…未詳。「松雪」と対を成すことから、薜越しに見える月。「薜」は植物の「やまかざら・つる草」。

③しかも春の桜は初々しく、夏の山々は辺り一面に緑を流し、やまかざら越しに見える月は秋の空に明るく懸かり、松に積る雪は冬に白さを掲げる。春夏秋冬の風情は同じではない。

而君優游乎暇日。以樂退休之餘味者、能与賢子弟良俊又同其所志。于月于花登焉憇焉、斯樂天壤不可容也。

①而して君は暇日に優游す。退休の餘味を以て楽しむ者は、能く賢子・弟良・俊又^{しんが}と其の志す所を同じくす。月に花に焉に登り焉に憩い、斯に天壤の容るる可からざるを楽しむなり。

②「優游」…ゆったりしている様。『毛詩』（大雅「生民之什 卷阿」）に「優游爾休矣（優游して爾休す）」とある。

「退休」…官職を辞して静かに暮らすこと。延宝6(1676)年、就方は老齡を以て隱居を許された。「俊又」…才と徳に抜きんでた人物。蘇軾「賜誥戸部侍郎趙瞻陳乞便郡不允詔」（『東坡全集』巻109）に「養育俊又、待其成材（俊又を養育し、其の材と成るを待つ）」とある。

「樂天壤」…宋・司馬光「独樂園記」（『古文真宝後集』巻上「記類」）の「不知天壤間、復有何樂可以代此也（知らず天壤の間、復た何の楽しみ有りてか以て此に代う可けんや）」を踏まえ、「古畑別業」を「独樂園」になぞらえる。「天壤」は天と地。

③そして就方殿は休日をゆったり過ごされる。職を辞して後の趣を楽しむ者は、賢い子弟や良き俊又とその志を同じくすることが出来る。明月の頃や花の季節にここに登り憩い、天地の間で得ることの出来ないかの独樂園の楽しみを楽しむ。

間者請記于余。而非親見手指品評其風月、則不写之于懷、越從君而游焉。

①「間者」記を余に請わる。而れども親しく見て手指して其の風月を品評するに非ざれば、則ち之を懷に写さず、越に君に従いて遊ぶ。

②「間者」…近頃・この頃。「者」は時間を表す語につく接尾語。

「手指」…人間の指。ここでは自分の手で記を作ることと言う。宋・裴駰『史記集解』（巻129「貨殖列伝」）の注に「古者無空手游网日、皆有作務。作務須手指、故曰手指。以別馬牛蹄角也（古者は空手游网無く、皆務を作す有り。務を作すは手指を須ゆ、故に手指と曰う。以て馬牛の蹄角と別つなり）」とある。

「風月」…風と月で美しい風景を言う。杜甫「吹笛」詩（『杜詩詳註』巻17）に「吹笛秋山風月清、誰家巧作斷腸声（吹笛秋山風月清く、誰が家か巧に断腸の声を作す）」とある。なお、「別墅記」は「風日」に作る。

「越」…語調を整える語。『毛詩』（国風「陳風 東門之粉」）に「越以駸邁（越に駸邁を以て邁く）」とある。

「君」…毛利就方。「別墅記」は「越從就方而遊焉」に作る。

③この頃私に別業についての記を請われた。しかし自分の目で見て記を作り風景の品定めをしてはいなかったため、心に写し描くことなく、就方殿に従って出かけたのである。

其取途也、初窳鬱以盤礴、奥岑寂以夷曠。悠揚而举目、則金城傑兮馳蒼岑於西北、固壯基於雲端。

①其れ途を取るや、初めは窳鬱として以て盤礴たり、奥は岑寂として以て夷曠たり。悠揚として目を挙げれば、則ち金城傑として蒼岑を西北に馳せ、固壯は雲端に基づく。

②「窳鬱」…突然草木が生い茂っている様。清・段玉裁『説文解字注』（巻7）に「窳從穴中卒出（窳は穴中より卒に出づ）」とある。また『毛詩』（国風「秦風 晨風」）の「鬱彼北林（鬱たる彼の北林）」の毛伝に「鬱積也（鬱は積なり）」とある。

「盤礴」…雄大な様。白居易「有木詩八首 其四」詩（『白氏長慶集』巻2）に「心蠹已空朽、根深尚盤礴（心は蠹まれて已に空しく朽ちたり、根は深くして尚お盤礴たり）」とある。

「岑寂」…高く物静かな様。宋（南北朝）・鮑照「舞鶴賦」（『六臣註文選』巻14）に「去帝郷之岑寂（帝郷の岑寂を去る）」とあり李善注に「岑寂猶高静也（岑寂猶お高静のごときなり）」とある。

「夷曠」…平らで広々とした様。『明史』（巻317「広西土司列伝」）に「又郡地夷曠、可宿数万師（又郡地夷曠にして、数万の師を宿す可し）」とある。

「悠揚」…遥かな様。

「金城」…堅固な城。ここでは指月城を言う。原欽「桂就定別墅記」に「仰望金城則有磐石之固（金城を仰ぎ望めば則ち磐石の固有り）」とある。

「蒼岑」…青い峰。指月山を指す。

「雲端」…雲の上。唐・祖詠「終南望餘雪」詩（『全唐詩』巻131）に「終南陰嶺秀、積雪浮雲端（終南陰嶺秀で、積雪雲端に浮かぶ）」とある。

③道を辿ると、最初は突然草木が雄大に生い茂り、奥に行くにつれて静かで平らかに広々とする。遥かに目をやれば、指月城が高く抜きん出てその青い峰を西北に向かわせ、雲の上に勇壯堅固な姿を見せている。

而海上諸山如見島之煙色、通其勝於十八里之外。如相島、鯖島、櫃島、日島、大島等諸島、亦各騁而並岳走

而放勢。実足覚夫望之不可極也。

①而して海上の諸山は見島の煙色の如く、其の勝を十八里の外に通ず。相島、鯖島、櫃島、日島、大島等の諸島の如きは、亦た各おのおの 騎せて岳を並べ走りて勢を放つ。実に夫の望の極むる可からざるを覚ゆるに足るなり。

②「見島」…萩沖約46キロの日本海に浮かぶ萩市見島。原文は「島」を異体字「嶋」に作る。「煙色」…かすんで見える様。原文は「煙」を異体字「烟」に作る。

「十八里之外」…『地下上申』^{註5)}の「見島郡浦方境目書」に「同所(※見島)より萩川口・玉江浦・三見浦・通浦・瀬戸崎浦・肥中・越ヶ浜・小畑浦・須佐 右いつれも拾八里余之積り」とある。「外」は、萩川口や玉江浦などより内陸に位置する上野からもこれらの島々が見えることを言う。

「相島～大島」…現在の相島、鯖島、櫃島、肥島(日島)、大島。相島と鯖島は、原文では「島」を異体字「嶋」に作る。

③そして海上に浮かぶ山々はかすむ見島のように、その美しい景色を十八里の外上野にまで届けている。相島、鯖島、櫃島、肥島、大島の島々は、またそれぞれ広がって岳を並べ勢いを放っている。その眺めは極めることが出来ないと十分に感じさせる。

若夫海水揚波白日平灘、雲霞潮汐之杳遠、沙鳥風帆之細微、莫不畢出焉。浩如翠天列星燁兮祭目也。遂如仙洞蓬萊幽而無垠。

①若し夫れ海水波を揚ぐるも白日平灘なれば、雲霞潮汐の杳遠、沙鳥風帆の細微、ことごとく畢く出でざるは莫し。浩たること翠天列星の如く燁として目に祭たり。遂きこと仙洞蓬萊の如く幽として垠無し。

②「平灘」…平らな水際、岸辺。

「雲霞」…雲ともや。宋(南北朝)・謝靈運「石壁

精舎還湖中作」詩(『六臣註文選』卷22)に「林壑斂暝色、雲霞収夕霏(林壑暝色を斂め、雲霞夕霏を収む)」とある。

「潮汐」…朝夕のうしお。

「燁」…光り輝く様。

「祭目」…鮮明に見える。「祭」は、『毛詩』(小雅「鹿鳴之什 伐木」)に「於祭洒埽(於祭として洒埽し)」とあり、毛伝に「祭鮮明貌(祭は鮮明の貌)」とある。

「蓬萊」…東海上にあり仙人が住むとされる伝説の山。ここでは「仙洞」と共に仙人の住まいを言う。『史記』(卷6「始皇本紀」)に「海中有三神山、名曰蓬萊、方丈、瀛洲(海中に三神の山有り、名を蓬萊、方丈、瀛洲と曰う)」とある。

③海の波が高くとも日中の平らかな水辺であれば、遙か遠くの雲ともやに朝夕のうしお、小さく見える浜辺の島に風を受けた帆、全て見えないものは無い。蒼天の星のように広がり、光り輝き鮮明に見える。その奥深さはあたかも仙人の住まいの如く静かにどこまでも続いている。

意齷齪而初迷眼、杳冥而遂驚上。

①意あくせく齷齪として初は眼を迷わし、杳冥として遂に驚せ上る。

②「齷齪」…差し迫った様。唐・孟郊「登科後」詩(『孟東野詩集』卷3)に「昔日齷齪不足誇、今朝放蕩思無涯(昔日齷齪として誇るに足らず、今朝放蕩して思いは涯無し)」とある。

「迷眼」…景色の美しさに目移りすること。宋・王安石「馬上軫韻」詩(『臨川文集』卷10)に「三月楊花迷眼白、四月柳条空老碧(三月楊花迷眼の白、四月柳条空老の碧)」とある。

③気持ちは焦り最初はあれこれと目移りしてしまい、薄暗い中をそのまま急いで上った。

土原之遐望、誰攀羽翮之遙。

①土原の遐望、誰か羽翮の遙かなるに攀ぼらん。

②「土原」…地名。烏田智庵『萩古実未定之覚』^{註6)}

に「渡り口と云名は松本へ古は此地より船渡し也と云。其後真中に洲出来たり。其所土取場となる。或者土原と云しと也。其後中島となり後には追々家を作る。右之故土原と云也。虚実不知なり」とある。また、作者未詳の『長門金匱』^{註7)}に「土原と云ハ松村開作（※毛利隠岐（就頼）の指示で行われた干拓）の時古川節開作成、新川筋の土をこのところへ上げ候ゆえ右の名を云」とある。「萩城下町古地図（慶安五年作）」^{註8)}は、現在の萩市土原一区の一、松陰大橋の辺りに「土原船渡」と記す。

「遐望」…はるかに眺めやること。梁・徐悱「古意酬到長史漑登琅邪城」詩（『六臣註文選』卷22）に「登陴起遐望、廻首見長安（陴に登り起ちて遐望し、首を廻らし長安を見る）」とある。

「羽翮」…鳥。「羽」も「翮」も共に「はね・つばさ」の意。西晋・左思「魏都賦」（『六臣註文選』卷6）に「羽翮頡頏、鱗介浮沈（羽翮頡頏し、鱗介浮沈す）」とある。

③遙か土原を眺めやるのに、鳥のように高く舞い昇ることはない。

春日之神炎交霊、跡於城壘之堅。

①春日の神炎交霊、城壘の堅に跡ぬ。

②「春日」…現在の堀内春日神社。『萩古実未定之覚』に拠れば、大同2(807)年に奈良から勧請され、慶長12(1607)年に江向の古春日地（伊予八幡祀の地）から現在の地に遷祀された。「萩城下町古地図（慶安五年作）」では鳥居及び社殿が描かれている。

「神炎」…霊妙な輝き。「炎」は「焰」に通じ、「勢

い・氣勢」の意。春日神社の威光を言う。宋・周紫柴「次韻詹伯尹舒天用和答二首 其一」詩（『太倉稊米集』卷4）に「埋光久未識、神焰凌太清（光を埋めて久しく未だ識らず、神焰は太清を凌ぐ）」とある。

「交霊」…二つの霊気が合体する。「神炎」と同じく春日神社の威光の偉大さを言う。魏・文帝曹丕の「感物賦」（『漢魏六朝百三家集』卷24「魏文帝集」）に「伊陽春之散節、悟乾坤之交霊（伊れ陽春の散節、乾坤の交霊を悟る）」とある。

「城壘之堅」…春日大社の東側から南側にかけて、三の丸と城下町を分ける外堀が通り、「萩城下町古地図（慶安五年作）」では、三の丸側に「土手高五間（※「三間」ともある）山形ナリ」と記した土手が描かれている。「城壘」はこの土手を指す。堅固な土手。

「跡」…あとを辿りたずねる。春日神社が外堀の土手を辿ったところにあることを言う。

③春日神社の壮大な威光を、外堀の堅固な土手に辿りたずねる。

田中之独松、暈翠而可倚。観堂聚聳於西霄。

①田中の独松、翠を暈ねて倚る可し。観堂は西霄に聚り聳ゆ。

②「田中之独松」…田中一本松荒神。『当島宰判風土注進案 河嶋庄』^{註9)}に「田中一本松濫觴は萩中央故松一本為験木被植置鎮守之社也」とある。「寛文期萩城下町絵図」^{註10)}では、現在の中央公園「水の広場」辺りに一本松が描かれるのみだが、「萩城下町割図（宝永年間）」^{註11)}では鳥居と建物を確認できる。

「観堂」…観と堂は、共に高い建物を言う。『当島宰判風土注進案 河嶋庄』には、田中一本松荒神社には「神殿・釣屋・拝殿」があったことが記されている。

「西霄」…「霄」は天空・空。西の空。

- ③田中一本松荒神は、松の緑が寄り添い重なる。社殿は西の空に向かい集まりそびえている。

玉江之流光、共天宇而同媚。

- ①玉江の流光、天宇を共にして媚を同じくす。
- ②「玉江」…地名。萩市大字山田玉江及び玉江浦。橋本川に面する。『地下上申』の「玉江浦石高付境目書」に「惣船数七拾五艘 但大小獵船之分」と記され、浜崎浦・鶴江浦・越ヶ浜浦と並ぶ要津であった。萩八景の一つ「玉江秋月」の地。「萩城下町古地図（慶安五年作）」では「玉井」と記されている。近藤清石氏は「もと三見郷の内にて玉井と云いたるを、萩八景を定むるに、一江たらざるを以て井を江にあらためたなりと云う」^{註1 2)}とするが、本記によって萩八景選定以前に「玉江」の名称があったことが確認できる。

「流光」…時の経過とともに動く月の光。魏・曹植「七哀」詩（『曹子建集』巻5）に「明月照高楼、流光正徘徊（明月高楼を照らし、流光正に徘徊す）」とある。

「共天宇」…「天宇」は空。橋本川に映る月と天に懸かる月の両者を意識した表現。川面に映る月が空の月とともにあることを言う。

「同媚」…「媚」は美しい。ともに美しい。

- ③玉江の水面に映る移ろう月の光は、空に懸かる月ともに美しい。

桜渡之湛緑、時接漁火之外。

- ①桜渡の湛緑、時に漁火の外に接す。
- ②「桜渡」…渡し場の名。現在の萩市大字河添の橋本川沿いで、河川公園付近。「萩城下町古地図（慶安五年作）」に「桜船渡」とある。この辺りの川の流れを「桜江」と言う。萩八景の一つ「桜江暮雪」の地。『地下上申』「椿西分由

来書」に「桜江と申名ハ、往古延喜帝之親王さかゝミ之王子此所へ流され御出候時、今之桜山へ桜を被植候より申伝候由ニ御座候、依之前之江ノ名をも桜江と申候由ニ御座候」とある。

「漁火之外」…「漁火」は、玉江浦の漁船の漁火。

『地下上申』の「玉江浦由来」に「夏秋は鱒・鯖釣獵仕、冬は鰯釣獵仕候事」とあり、橋本川河口から海に出て魚を獲っていた。「外」は、桜船渡しの緑が玉江浦の先、海にまで続いていることを言う。

- ③桜船渡のあふれる緑は、ちょうど漁火の灯る海まで続いている。

後鬼之社、叢樹高風。

- ①後鬼の社、叢樹高風たり。
- ②「後鬼之社」…五鬼権現社。現在の玉江神社。『当島宰判風土注進案 山田村』に「右五鬼権現社は（中略）輝元公卿御不例之節大江山より後鬼前鬼被召寄御祈禱御札守護彼山に被遊御納」とある。木梨恒充『八江萩名所図画』（二之巻）^{註1 3)}の「五鬼権現社」に、神社のある山を「号けて権現山といふ」とある。「権現山」は「萩城下町絵図（延享元年～四年）」にその名が見える。

「高風」…山に吹く風。唐・皮日休「恵山聴松菴」詩（『全唐詩』巻615）に「殿前日暮高風起、松子声声打石床（殿前日暮に高風起き、松子声声として石床を打つ）」とある。

- ③五鬼権現社は、権現山の木々を風が吹き抜ける。

平安古里、川深醉眼松江在目知張翰之可愛。

- ①平安古の里、川深くして醉眼は松江の目に在りて張翰の愛す可きを知る。
- ②「平安古」…地名。現在の萩市大字平安古。『山口県風土誌』（巻229）に「萩諸町日記云、先年

堀内に平安寺と云へる寺有之（中略）依之平安寺古門前町といへる心を以て、平安古町と名付し由古老の説あり」とある

「酔眼松江」…北宋・蘇軾「杜介送魚」詩（『東坡全集』巻16）に「酔眼朦朧覓歸路、松江煙雨晚疎疎（酔眼朦朧として歸路を覓むれば、松江の煙雨晩に疎疎たり）」とあるのを踏まえる。蘇軾詩は『晋書』（巻92 張翰列伝）及び宋（南北朝）・劉義慶『世説新語』（巻中「識鑑」）に載せる張翰の故事を典故とする。故事は、張翰が秋風に故郷（呉）の菰菜のスープと鱸魚の膾を思い出し、官職を捨てて故郷に戻ったというもの。

「張翰」…258?～319? 中国南北朝時代の晋の文人。字は季鷹。呉郡（現在の江蘇省）の人。

③平安古の辺りは、川が深く蘇軾がほろ酔いで眺めた松江のように張翰が愛した故郷の魚が泳いでいる。

金谷之景、誰逐石崇之事。

② 金谷の景、誰か石崇の事を逐わん。

②「金谷」…金谷神社。明治六(1873)年に改称されるまでは「金谷天満宮」。『萩市史』¹⁴⁾に拠れば、文治二(1180)年に長門守佐々木四郎高綱が太宰府天満宮より勧請したとされる。当時は現在の金谷神社よりやや東の奥金谷に位置していたが、享保五(1720)年に現在の場所に移された。「萩城下町割図（宝永年間）」には「正灯院 天神」と記されている。正灯院は金谷天満宮の社防の寺号で、その別当が神社の祭事を司っていた。『長門金匱』はこの古天神の地を往古萩八景の一つ「三江晴嵐」の地とする。

「石崇」…249～300 西晋の貴族。字は季倫。当時の都洛陽の西北郊外にあった「金谷園」という壮大な荘園で華麗な詩会を開いた。李白

「春夜宴桃李園序」（『古文真宝後集』巻上「序類」）に「如詩不成、罰依金谷酒数（如し詩成らずんば、罰は金谷の酒数に依らん）」とある。

共通する「金谷」からの連想。

③金谷天満宮の景色のすばらしさは、かの石崇の金谷園にも引けを取らないだろう。

梁瀬濁淵之外泄、其昌乎哉。

①梁瀬濁淵の外泄、其れ昌かなるかな。

②「梁瀬」…阿武川（椿川）の流れの名。『当島宰判風土注進案 椿西分』に「今椿川上の流柳瀬桜江玉江川など皆椿川の流れなり云々」とある。また『長門金匱』に「太鼓椀の脇を梁瀬と云は鮎を取とて秋中昔は梁をかけ申候故やな瀬と云説あり又古老の物語に中津江の方川端に押なへて河柳有ければ柳瀬と云説もあり」とある。「太鼓椀（湾）」は、阿武川の松本川と橋本川に分岐する辺りの流れを言う。『八江萩名所図画』（参之巻）は「梁瀬六本松」図を載せる。

「濁淵」…現在の萩市大字椿濁淵にその名が残る。

『地下上申』「椿西分由来書」に「右小村之内濁淵と申名は、以前は椿川、桜江へ通り候、当橋本川御堀せ候て已来埋り跡淵にて御座候、以前より淵深くにこり候故申来候事」とある。また『萩古実未定之覚』に「川上よりの流水螢火山の下より南明寺の麓小松江の方へ行桜江え出る元和二年今の様に川筋を堀て流る」とあり、もともと椿川（阿武川。ここでは橋本川）は現在の沖原から大照院下に向かって直流していたが、それを現在の川筋に湾曲させた。濁淵は、湾曲以前の椿川の名残である。

「萩城下町割図（宝永年間）」では、阿武川の川筋の一部が現在の金谷天神辺りまで入り込み、同所に「にこりふち」と記されている。

「梁瀬」同様、阿武川の流れの名であった。

『長門金匱』に拠れば、往古萩八景の一つ「柳江晚鐘」の地である。

「外泄」…水が外に溢れ出ることを言い、ここでは椿川（阿武川）から分かれた梁瀬と濁淵を言う。

③椿川から溢れ分かれた梁瀬と濁淵が、実にはつきりと見える。

而且其南山如隆景精舎、有黄門平公百年之祠。

①而も且つ其の南山は隆景精舎の如く、黄門平公百年の祠有り。

②「隆景精舎」…毛利元就の三男で、竹原小早川家を継承した小早川隆景の位牌を祀る黄梅山隆景寺。『萩古実未定覚』に拠れば、もとは山口問田村にあったが、慶長4(1609)年に萩に移り、寛永元(1624)年に無住となった鍛冶屋町の松雲院を賜った。その後桜江の薬園を賜り移るが、天和2(1682)年に炎上した天樹院が当地を本寺とすることになったために、霧口の雲溪院に移ったとする。隆景精舎はこの雲溪院を指す。

「黄門平公」…「黄門」は中納言の唐名。小早川隆景は従三位権中納言であった。「平公」は、小早川家が桓武平氏の流れをくむことを言う。

「百年」…小早川隆景は、約100年前の慶長2(1597)年に死没している。

③そして南山の隆景寺には、中納言であらせられた小早川隆景公を百年祀る祠がある。

霊椿之山、有羽林先公遺愛之廟。

①霊椿の山、羽林先公遺愛の廟有り。

②「霊椿」…大照院の山号、霊椿山。ここでは大照院を麓に抱く山々を指す。『萩古実未定覚』に「大照院様の山を御影山と云」とある。

「羽林」…近衛府の唐名。萩藩初代藩主毛利秀就の法名「大照院殿前二州大守四品羽林次将月

礪紹澄大居士」^{註15)}に基づく。

「先公遺愛廟」…毛利家の菩提寺である霊椿山大照院。もとは大椿山歓喜寺と言い、「萩城下町古地図（慶安五年作）」には同所に「歓喜寺」の名が見える。承応3(1654)年から明暦2(1656)年にかけて、二代萩藩主綱広が亡き父の菩提寺として整備し、父秀就の法名により名を大照院に改め、山号も霊椿山とした。

③霊椿の山には、朝廷にお仕えになった先君秀就公の菩提寺である大照院がある。

如椿八幡之社霊、蹤苕嶠示其特在。

①椿八幡の社霊の如きは、苕嶠ちようぎょうに蹤したがい其の特在るを示す。

②「椿八幡」…椿八幡宮。『八江萩名所図画』（二之巻）に「萩五社の一宮廓外の総鎮守にして、邑郷の産土神なり」とある。その創建時期について、『萩古実未定覚』は「仁治四年（※1243年）三月十五日鎌倉鶴ヶ丘より遷す」とする^{註16)}。現在の場所に移ったのは正和3(1314)年で、「萩城下町古地図（慶安五年作）」では同所に「椿八幡」とある。

「苕嶠」…山が高い様を言う。「嶠」は、もと異体字の「嶠」に作る。

③椿八幡の神殿は、高い山々にならいその存在を示している。

如桜山、呈春色於朝昏修多羅山、指月于霜寂之境。

①桜山の如きは、春色を朝昏の修多羅山に呈し、月を霜寂せうじきの境に指す。

②「桜山」…現在の面影山（佛山）。『地下上申』「椿西分由来書」に「佛山と申ハ往古当山ニ椿ノ大木有之、此木ニ霊現奇端之儀有之候由、右之木之霊面影ニ見候より面影山と申来候由伝候事」とあり、呼び名の由来を載せる。一方、「萩城下町古地図（慶安五年作）」は同山を「桜

ノ丸山」と記し、『萩古実未定之覚』には「むかし御薬園の地ハ桜江山と云て草木も無之山にて有之」とある。なお「桜山」の別称に関しては山本勉弥『萩附近の史実』^{註17)}所収の「拾穂録」に詳しい。

「修多羅山」…永福寺の山号。ここでは永福寺を言う。永福寺は椿八幡の社坊で、『萩古実未定之覚』に「修多羅山永福寺延享（※延喜の誤り）年中逆髪王子当地遷幸御建立修多羅山円覚院修多寺と云」とある。その後荒廃したが、天正年間(1573～91)に再興された。なお「修多羅山」については、『当島宰判風土注進案 椿西分』に「山号之由縁を尋に御城山指月山南に当テ両山対陽之儀ニ付、円覚経に寄り修多羅山と申伝候事」とある。なお、この山号に関しては、海潮寺住職木村隆徳氏の論考がある^{註18)}。

「指月」…禅語。『首楞嚴経』に載せる「如人以手指月示人（人の手を以て月を指して人に示すが如く）」の一節を踏まえる。宋・釈子璇『首楞嚴義疏注経』（巻2）^{註19)}に「指喩能詮言教、月喩所詮真理（指もて能詮の言教に喩え、月もて所詮の真理に喩う）」とあり、真理と経典との関係を月と指になぞらえる。ここでは仏門における真理の探究を言う。前掲木村隆徳氏の論考も参照。

「霜寂」…「霜」は、白く冷たいその性質で高潔さ、厳粛さを表す。「寂」は、「指月」からの連想で仏語の「寂靜」（煩惱から離れた悟りの境地）の意。

③桜山は、朝夕の修多羅山に春の景色を見せ、僧たちは厳粛な悟りの境地にあつて真理を求める。

大谷之出者入者往者反者、森詭前矣。

①大谷の出ざる者入る者往く者反る者、森前に詭^{いざな}う。

②「大谷」…地名。現在の萩市大字椿大屋。『地下上

申』「椿西分由来書」に「右小村之内大谷と申名ハ、当郷之入口字面之通大谷ニて候故、以前より申来候事」とある。なお、「御国廻御行程記」及び「行程記」^{註20)}は、いずれも「大屋」と表記する。

「森詭前」…森に囲まれた大谷（大屋）の谷を抜けると眼前に視界が開ける様を、あたかも森が人々を谷の外に誘い出すかのようにであると表現する。

③大谷を行き来する人々は、森に誘われて谷を出て前に進む。

長藪之篁、入欄而祭。南明有日輪之名、実崇大士之像。

①長藪の篁、欄に入りて祭たり。南明日輪の名有り、実に大士の像を崇ぶ。

②「長藪」…地名。『山口縣風土誌』（巻231）では字地「大屋」の小字地とするが、『地下上申』「椿西分由来書」、『当島宰判風土注進案 椿西分』共に載せず。「地下上申絵図」の「椿西分」では、現在の大屋川を観音橋からやや下流の辺り禅宗松雲院に至る川沿いに藪が描かれ、「長藪」の名が見える。この藪は「萩城下町古地図（慶安五年作）」でも同所に確認できる。

「入欄」…柵のように連なり続くこと。

「南明」…天台宗南明寺。山号は日輪山。『萩古実未定覚』は大同元(806)年の開闢とする。

「大士之像」…「大士」は高僧を言う。『当島宰判風土注進案 椿西分』に拠れば、南明寺の観音堂の観世音木仏は行基の、薬師堂の薬師如来は弘法大師の作とされる。

③長藪の竹藪は、川沿いに柵のように連なり美しい。日輪山の山号を持つ南明寺は、行基、弘法大師の作られた仏像を尊んでいる。

霧口之里、秋雑沆瀣之氣。

- ①霧口の里、秋沆瀟の気を雑う。
- ②「霧口」…地名。『地下上申』「椿西分由来書」に「右小村之内霧口村と申名ハ、椿瀬川より川霧立出候村ニて候故霧口と申之由申伝候」とある。
「沆瀟」…朝露。魏・嵇康「琴賦」（『六臣註文選』卷18）に「餐沆瀟兮帶朝露（沆瀟を餐し朝露を帯ぶ）」とあり、張銑の注に「沆瀟、清露也（沆瀟、清き露なり）」とある。
- ③霧口は、秋に大気が朝露を含む。

龍蔵之上、雲蒸気洪、蛟螭之執可企而待。

- ①龍蔵の上、雲は蒸たり気は洪たり、蛟螭の執企みて待つ可し。
- ②「龍蔵」…白牛山龍蔵寺。『萩市史』^{註21}に拠れば、創建は天平年間(729~48)とされる。その後荒廃していたが、応安年間(1368~74)に再興された。「御国廻御行程記」及び「行程記」には中津江の十本松山山麓に「禪宗龍蔵寺」と記されている。
「蛟螭」…伝説上の動物であるみずち。後漢・張衡「南都賦」（『六臣註文選』卷4）に「憚夔竜兮怖蛟螭（夔竜を憚り蛟螭を怖る）」とあり、劉向の注に「夔竜蛟螭水獸也（夔竜蛟螭は水獸なり）」とある。
「執」…仲間。執友。
「企」…仰ぎ待ち望む。
- ③龍蔵寺前の阿武川の畔では、雲気が立ち昇り溢れて、みずちの仲間たちが現れるのを待ち望む。

凡此山執、或岫縈霄而直上、或嶺出雲而特立。雲烟水泉、景勝万千。

- ①凡そ此の山執、或は岫の霄を縈りて直上し、或は嶺の雲を出でて特り立つ。雲烟水泉、景勝万千たり。
- ②「此山執」…「此山」は、桜山等、萩城下の南に

位置する山々。南山。「執」は「勢」に同じで「すがた・かたち」の意。この南山の姿。

- ③およそこの南山の姿は、あるものは空を巡るかのようになりに向かい、あるものは雲を凌いで独立する。雲やもや、川や泉、景勝は数えきれない。

川上之河環帶于山間。寔地脉之所從、可縮而得穿目杳杳。

- ①川上の河山間に環帶す。寔に地脉の從う所、縮す可くして目を穿き杳杳たるを得たり。
- ②「川上之河」…現在の阿武川。「川上」は地名で、『当島宰判風土注進案 川上村』に「当村名之發り古老之申伝ニ曰、椿郷之内ニ而水上ニ當り候在所故川上と唱候由ニ御座候事」とある。なお、「萩城下町古地図（慶安五年作）」は「河上川」と表記する。
「地脈」…「地勢」に同じ。山河の有様。
「可縮」…壮大な景色を縮めたかのように一望できることを言う。
- ③川上より流れ来る河は山間を巡っている。地勢に従うその有様は、目にはるかに一望できる。

奈古之嶺、尖而鬱于北浜。

- ①奈古の嶺、尖りて北浜に鬱たり。
- ②「奈古之嶺」…「奈古」は、現在の萩市大字椿東字奈古屋。「奈古屋」の由来について、『地下上申』「越ヶ浜浦由緒書」に「右（※越ヶ浜浦）往古奈古屋何某笠山ニ居城有之、馬鞍と笠山之間打越之浜ニて御座候」とある。「嶺」は笠山を言う。
「鬱」…木々が鬱蒼と茂る様。『長門金匱』に「越ヶ浜往古ハ殊の外深山にてけや木など沢山に有之」とある。
「北浜」…北の浜。「北」は、「御国廻御行程記」に「（※越ヶ浜）又越と云ハ北と云と同じ府城より北の浜なる故名と成北国を上古ハ越の国

と云を今ハ前中後をわかつ此類に比すと云々とある。

③奈古の笠山は、北の浜に鬱蒼としてそそり立つ。

腰浜之砂、亦茫而溥矣。

①腰浜の砂、亦た茫として溥し。

②「腰浜」…地名。現在の萩市大字椿東越ヶ浜。原欽「腰浜記」に「今茲七月初一、公遊乎腰浜（今茲七月初一、公腰浜に遊ぶ）」とある。『長門金匱』に「その景地能所なり」とあり、『八江萩名所図画』（六之巻）は大寧寺無隠禪師の「城中人不問四時絡繹遊此。蓋長主園囿而与民同其楽也（城中の人四時を問わず絡繹として此に遊ぶ。蓋し長主の園囿にして民と其の楽しみを同じくするなり）」という語を引く。

「溥」…広大な様。

③越ヶ浜の砂浜もまた、遠く広がっている。

浜崎之晩興、風浪起白鷗之眠。

①浜崎の晩興、風浪は白鷗の眠りを起こす。

②「浜崎」…地名。現在の萩市大字浜崎町。要津であった浜崎浦は、玉江浦・三見浦・鶴江浦・小畑浦・越ヶ浜浦・大井浦の七浦、五島（大島・櫃島・羽島・尾島・相島）及び見島とともに浜崎宰判の浦方支配を受けていた。『長門金匱』は、往古萩八景の一つ「萩津江暮雪」の地を「今浜崎浦ある脇なり」とする。

③浜崎の夕暮は、風に吹かれた波が白鷗の眠りを覚ます。

住吉之祠廟、実海若之所宅、瓊具幾許。誰伝虚誕之説。

神器維重深淺、三神之厚藩垣往往。

①住吉の祠廟、実に海若の宅する所、瓊具幾許ぞ。誰か虚誕の説を伝えん。神器は維れ深淺を重んじ、三神の厚き藩垣は往往たり。

②「住吉之祀廟」…浜崎の住吉神社。航海の神とし

て信仰される。『八江萩名所図画』（五之巻）に拠れば、承応元（1652）年、浜崎の町人が播州灘で嵐に遭い、堺の住吉社に立願して難を逃れたことから浜崎代官に願い出て勧請したとされる。

「海若」…海神。住吉神社勧請の由緒を踏まえる。宋・洪興祖『楚辞補注』（巻5「遠遊章句第五」）に「令海若舞憑夷（海若をして憑夷を舞わしむ）」とあり、注に「海若海神名也（海若は海神の名なり）」とある。

「瓊具」…美しい供え物。『漢書』（巻86「何武列伝」）に「寿為具召武弟頭（寿具を為して武の弟頭を召す）」とあり、顔師古の注に「具謂酒食之具（具は酒食の具を謂う）」とある。

「深淺」…善悪。魏・呉質「在元城与魏太子箋」（『六臣註文選』巻40）に「未知深淺（未だ深淺を知らず）」とあり、李善の注に「深淺猶善悪也（深淺猶お善悪のごときなり）」とある。

「三神」…和歌三神。『和歌三神公考』^{註2 2)}に「和歌三神と云ハ、住吉、玉津島、人麿、是也」とある。「住吉」からの連想。

「虚誕」…荒唐無稽なこと。王羲之「蘭亭集序」（『古文真宝後集』巻4「記類」）に「固知一死生為虚誕、齊彭殤為妄作（固に死生を一にするは虚誕為り、彭殤を齊しくするは妄作為るを知る）」とある。

「往往」…あちらこちら。住吉神社の藩垣の広さを言う。柳宗元「捕蛇者説」（清・沈徳潜『唐宋八大家文読本』巻7）に「往往而死者相藉也（往往にして死する者相藉るなり）」とある。

③住吉神社の社殿は、海神の住まうところで、数えきれない程の美しい供え物。誰がありもしない話を伝えようか。神器はその善し悪しを重んじ、三神の一つである住吉神社の藩垣は広大である。

唐樋之人家、雄虹板板大橋之架空。其過之者旅客遊子。

晴雨回首于青雲彩霓之際、実亦一奇也。

①唐樋の人家、雄虹板板として大橋の空に架る。其れ之を過ぎる者は旅客遊子なり。晴雨に首を青雲彩霓の際に回らせば、実に亦た一に奇なり。

②「唐樋」…地名。現在の萩市大字唐樋町。「唐樋」とは「唐（中国）風の樋門」。「萩城下町古地図（慶安五年作）」では同所に2箇所の樋門の存在を確認できる。唐樋は藩主が参勤交代時に利用する「御成道」の途中にあり、同所を南に進み三田尻に至る街道が「萩往還」である。また「萩城下町古地図（慶安五年作）」本町筋の西端に「札辻」と記され、唐樋は多くの人々が行き交う「高札場」であった。なお、『当島幸判風土注進案 河島庄』は、往古の「八江八景」の一つ「藤江落雁」について「唐樋佐世屋敷之所」とする。

「雄虹」…虹。主虹とも言う。古来、虹には雌雄があると考えられていた。『太平御覧』（巻14「虹蜺」）に「蔡邕月令章句曰虹蜺蝀也。陰陽交接之氣着於形色者也。雄曰虹、雌曰霓（※「蜺」に同じ）（蔡邕月令章句に曰く虹は蜺蝀なり。陰陽交接の気の形色に着く者なり。雄を虹と曰い、雌を霓と曰う）」とある。

「板板」…虹の作るアーチの反り返る様を表す。元・舒頌「微雪喜晴」詩（『貞素齋集』巻5）に「愁雲起層層、大雪落板板（愁雲層層として起こり、大雪板板として落つ）」とある。

「青雲」…青い空。齊・孔稚珪「北山移文」（許槿『六朝文絜』巻四）に「干青雲而直上（青雲をおかして直ちに上る）」とある。

「霓」…虹。副虹とも言う。「雄虹」の項も参照。

③唐樋の家々の上には、半円を描いた虹の大橋が架かっている。唐樋を通り過ぎるのは旅人たちである。晴れの日や雨の日に青い空と彩り美しい虹を振り返り観れば、実にまたすばらしい。

渡口之上、萩川の干、偉哉渺々。

①渡口の上、萩川の干、偉なるかな渺々たり。

②「渡口」…地名。古萩町筋と渡り口筋との境を流れる新堀川に架かる渡り口橋に、「明和五（※1768）年重修石換土」と刻された欄干が残る。『萩古実未定之覚』に「渡り口と云名ハ松本へ古ハ此地より船渡し也と云其後真中に洲出来たり其所土取場となる或者土原と云しと也其後中島となり後には追々家を作る右之故土原と云也虚実不知なり」とあるが、「萩城下町古地図（慶安五年作）」では弘法寺のある浮島から唐樋にかけて大きな入り江があり、その北端に対岸の洲に続く二つの樋門を持つ堤防を確認できる。これが渡り口筋に当たり、幹線道路を表す朱線が引かれている。また、「萩城下町割図（宝永年間）」では同筋に「わたり口町」とあり、二つの樋門は共に橋として描かれる。『長門金匱』に「御打入の時分より松本渡し場桜江渡し橋本口古萩口に物頭屋敷を仰付られこれ役屋鋪也」とあり、松本川河口付近の大きな地形変化に伴い、渡口は萩築城の頃には松本への船渡しとしての役割を終え、地名を残すだけのものとなっていた。『長門金匱』は、往古萩八景の一つ「二江夜雨」を「渡り口橋の辺」とする。

「萩川」…萩を流れる川。現在の松本川。『長門金匱』に「当所を萩と申事ハ今古萩と云所に人家あり今の田町通りより南東ハ皆沼にて芦原の水溜りなり田も眩々無之よき道もなし東北の方当萩村と云後総名萩と云也本の名所を古萩と云うなり」とある。

「渺々」…遙かに遠い様。明・劉績『管子補注』（巻16）に「渺渺乎如窮無極（渺渺乎として窮むれども極無きが如し）」とあり、注に「渺渺微遠貌（渺渺は微遠の貌）」とある。

③渡口のあたり、松本川の水辺は、何ともすばら

しく遙かである。

鶴江之平山遠浦、凝眸于漁釣之岸。

- ① 鶴江の平山遠浦、眸を漁釣の岸に凝らす。
- ② 「鶴江」…地名。現在の萩市大字椿東鶴江。『地下上申』「鶴江浦由緒書」に「鶴江浦と申は、往古当山え鶴二羽渡居すこもり仕候由、依之鶴江浦と申之由伝候」とある。山を鶴江山（寛文期萩城下町絵図）は「鶴江壇」と記すといったが、「萩城下町古地図（慶安五年作）」には「釣井壇」と記されている。『長門金匱』は往古萩八景の一つ「兼江夕照」の地とする。
- ③ 鶴江の平らかな山と遠い港は、岸辺の漁村に目にとまる。

雁島之曲汀危石、交光于弘法之嶼。平跡遠視、排闥而来者率皆如此。

- ① 雁島の曲汀危石、光を弘法の嶼に交ゆ。平跡遠視すれば、闥を排して来たる者率皆此の如し。
 - ② 「雁島」…地名。現在の萩市大字椿東雁島。現在は「がんじま」と呼ばれている。『当島宰判風土注進案 椿東分』に「玄旨法印道之記に、とかくして長門国に至り磯の上島々を見渡して行にかり島という所ありときく」また「今の雁島と唱るハ後の俗称にて、雅名にハかり島と唱うべきことなり」とある。「萩城下町割図（宝永年間）」の同所の記載は「雁りしま」と読める。
- 「危石」…切り立った岩。唐・劉長卿「送鄭説之歙州謁薛侍郎」詩（『劉隨州集』巻4）に「船経危石住、路入乱山行（船は危石を経て住まり、路は乱山に入りて行く）」とある。
- 「光」…ここでは景色を言う。風光。
- 「弘法」…寄船山弘法寺。大同2(807)年創建。松本川西岸の浮島にあった。『萩古実未定之覚』に「大同二年弘法大師帰朝之時平戸浦より船を此島に寄と云」とあり、山号はこれに由来

する。『当島宰判風土注進案 河嶋庄』の引く「長州萩府寄船山弘法寺来縁記」に「先住空泉道橋可造ト欲スレトモ志ヲ不果、年序経貞享元年就直付テ吉就公へ訴へ被免之、同四年成就ト見タリ」とある。

「嶼」…原文は「山+与」に作る。

「排闥」…門を押して入る。「闥」はくぐり門。ここでは景色が迫ってくる様を言う。宋・王安石「書湖陰先生壁二首 其一」詩（『臨川文集』巻29）に「一水護田將緑遶、両山排闥送青来（一水田を護り緑を將いて遶り、両山闥を排し青を送りて来たる）」とある。

- ③ 雁島の曲がりくねった水際と切り立った岩は、弘法寺のある浮島と景色を交わらせている。平らに広がる景色をはるかに眺めやると、このように目に迫ってくる。

近俯則中江之渡。人朝昏繹々。遠者近者聚為最多。

- ① 近くに俯せば則ち中江の渡なり。人朝昏に繹々たり。遠者近者聚り最も多しと為す。
 - ② 「中江之渡」…「中江」は中津江。十日市筋から松本川を中津江に渡る渡し場。古畑に近接する渡し場で、「萩城下町古地図（慶安五年作）」に「十日市陸渡」とあり、渡し場に続く道筋には幹線道路であることを示す朱線が引かれている。この道筋は「萩城下町割図（宝永年間）」に「十日市すし」の名が見え、松本川を挟んだ対岸には「中津江」と記されている。
- 「繹々」…連なる様。『漢書』（巻87上「楊雄列伝上」）に引く楊雄「甘泉賦」に「迺望通天之繹繹（迺ち通天の繹繹たるを望む）」とあり、顔師古の注に「繹繹相連貌（繹繹は相連なる貌）」とある。
- ③ 近くを見下ろすと中津江の陸渡である。一日中人々が連なり行きかっている。遠くに住む者近くに住む者最も多く集まるところである。

望而不煩、実能左顧右眄応接不暇者也。

- ①望みて煩ならず、実に能く左顧右眄して応接暇あらざる者なり。
- ②「左顧右眄」…あちこちを見回す。魏・曹植「与呉季重書」(『六臣註文選』卷42)に「左顧右眄、謂若無人。豈非君子壮志哉(左顧右眄して、謂いて人無きが若し。豈に君子壮志に非ずや)」とある。
「応接不暇」…美しい景色が多すぎて対応しきれないこと。『世説新語』(卷上「言語」)に「山川自相映發、使人応接不暇(山川自ら相映發し、人をして応接暇あらざらしむ)」とある。
- ③眺めて飽きることはなく、あちこちを見回して暇がないほどの美しい景色である。

蓋樂者人所同有。而全其樂者誰幾有乎。

- ①蓋し楽しみは人の同じく有る所なり。而れども其の楽しみを全くするは誰か幾か有らん。
- ②「蓋」…原文は異体字「盖」に作る。
「樂者人所同有」…『唐書』(卷122「魏元忠列伝」)に「人有樂君共之、君有樂人慶之、可謂同樂矣(人に楽しみ有りて君之を共にし、君に楽しみ有りて人之を慶す、楽しみを同じくすと謂う可し)」とある。
- ③思うに楽しみは誰もが持っている。けれどもその楽しみを満喫できる人間はどれくらいいるのか。

今君族譜極溥、世已希有。而且年齒高邁身極臣職、蒼生同歸其博。退閑居、黃耆益康。是非所冀而至也。

- ①今君の族譜極て溥く、世已に有ること希なり。而も且つ年齒高邁にして身は臣の職を極め、蒼生其の博に歸す。退きて閑居し、黃耆にして益康たり。是れ冀いて至る所に非ざるなり。
- ②「族譜」…家譜。ここでは一族を言う。『書言故事大全』(卷1「宗族類」)に「叙宗族長幼之名曰族譜(宗族長幼の名を叙して族譜と曰う)」

とある。

- 「年齒」…年齢。『莊子』(雜篇「徐無鬼」)に「年齒長矣、聰明衰矣(年齒長く、聰明衰う)」とある。
- 「蒼生」…人々。民衆。杜甫「行次昭陵」詩(『杜詩詳註』卷5)に「往者災猶降、蒼生喘未蘇(往者災猶お降り、蒼生喘ぎ未だ蘇らず)」とある。
- 「黃耆」…老人。原文は「黃考」に作るが、「考」は「耆」の誤りであろう。『毛詩』(小雅「南有嘉魚之什 南山有台」)に「樂只君子、遐不黃耆(只の君子を楽しませ、黃耆なさざるに遐し)」とある。「黃」は老人の髪の色を、「耆」は老人の肌を言う。

- ③今就方殿の一族は実に多く、世間ではめったにないことである。しかも高齢でありながら人臣位を極め、人々はその度量の大きさに帰順する。職を辞して閑居するが、老いて益々健やかである。これは願っても到達することのできないものである。

然則君之仁智与夫名山勝水同為不朽。不亦全乎。遂為之記。

- ①然らば則ち君の仁智と夫の名山勝水と同一に朽ちざるを為す。亦た全からずや。遂に之の記を為る。
- ②「仁智与夫名山勝水」…『論語』(雍也第六)に「知者樂水、仁者樂山(知者は水を樂み、仁者は山を樂む)」とあるのを踏まえる^{註2 3)}
「不亦全乎」…「不亦～乎」は感嘆表現。『論語』(学而第一)に「有朋自遠方來、不亦樂乎(朋の遠方より來たる有り、亦た樂しからずや)」とある。
- ③そうであれば就方殿の仁智とかの名山名水はともに朽ちることがない。なんと完璧であることか。そこでこの記を作るのである。

貞享元年秋九月中浣、山田熙謹撰并書。

- ①貞享元年秋九月中浣、山田熙謹んで撰べ書を并す
- ②「中浣」…中旬。
- ③貞享元年秋九月中旬、山田熙は謹んで著述し書をあわせ添える。

[註]

- 1) 『復軒文藁』及び『復軒遺稿』は共に山口県立山口図書館所蔵。以下、山田原欽の文は全てこの2書に拠る。
- 2) 萩博物館所蔵。萩博物館監修・NPO 萩まちじゅう博物館発行の複製版あり。同じ絵図の一部が、萩明倫学舎に「寛保年間（1741～1744）の萩城下町絵図」として展示されている。
- 3) 山口県文書館・毛利家文庫所蔵。毛利藩郡方地理絵図師有馬喜惣太の手による地下上申附図の「一村限明細絵図」。
- 4) 金谷 治『論語』（岩波文庫 岩波書店 1963）155頁。
- 5) 山口県地方史学会編『防長地下上申（全4巻）』（山口県地方史学会 1980）に拠る。
- 6) 村田峰次郎編『長周叢書 上』（マツノ書店 1991）所収。
- 7) 同上。
- 8) 山口県文書館所蔵「萩絵図」。伊東進氏の複写作図が萩博物館に所蔵され、1984年に萩市郷土博物館友の会より近藤隆彦編「慶安五年作成 萩城下古図」として発行されている。
- 9) 山口県文書館編『防長風土注進案（全21冊+別冊2）』（山口県立山口図書館 1962）に拠る。
- 10) 山口県編集『山口県史 史料編 中世4』（山口県 2008）の「付録」に拠る。萩博物館に「貞享年間（1682～1687）作成絵図」として所蔵される。伊東進氏の複写作図版（着色版）が作成されている。
- 11) 萩博物館所蔵。
- 12) 近藤清石編『山口県風土誌（全14冊）』（歴史図書社 1973）巻232、486頁。
- 13) 大和綴和本。全6巻6冊と付録1冊の計7冊で、明治25年の刊行。1991年にマツノ書店より復刻刊行され、松野二郎による読み下しと注釈が付録として別冊添付された。
- 14) 萩市史編纂委員会編『萩市史（第3巻）』（萩市 1987）406～407頁。
- 15) 時山彌八『増補訂正 もりのしげり』（赤間関書房 1969）81頁。
- 16) 近藤清石は「仁治は文治の謬」とする（『山口県風土誌』巻231）452頁。
- 17) 『萩附近の史実（萩文化叢書 第四巻）』（萩文化協会発行 1941）81～84頁。
- 18) 『新・史都萩』（第15号 2005）所収「萩のシンボル『指月』について」2～6頁。
- 19) 市立米沢図書館デジタルライブラリー（米沢善本72）に拠る。
- 20) 共に山口県文書館・毛利家文庫所蔵。
- 21) 萩市史編纂委員会編『萩市史（第3巻）』（萩市 1987）477～478頁。
- 22) 宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵本に拠る。
- 23) 「楽」の解釈は、加地伸行『論語 増補版』（講談社学術文庫 2009）137～138頁に拠る。

[主要参考文献] ※注で示したものと論文類を除く。

- 1) 安藤紀一編（1940）『山田原欽』明倫同窓会（非売品）
- 2) 防長新聞山口支社編（1966）『近世防長諸家系図 綜覧』防長新聞社
- 3) 林英夫監修（1972）『増訂・近世古文書解説字典』柏書房
- 4) 御蘭生翁甫（1974）『防長地名淵鑑』マツノ書店
- 5) 山口県阿武郡教育会編（1975）『阿武郡志（全）』名著出版
- 6) 萩青年会議所創立20周年記念事業（1978）『萩図誌』萩青年会議所

- 7) 山口県立山口博物館編 (1984) 『防長の古地図』 図書館
山口博物館
- 8) 藤原鶴来編 (1985) 『新書道字典』 二玄社
- 9) 浅井潤子・藤本篤編 (1988) 『古文書判読字典』 柏書房
- 10) 山口県文書館編 (1989) 『絵図で見る 防長の町と村』 山口県文書館編
- 11) 河村一郎編 (1996) 『近世防長儒学史関係年表』 河村一郎
- 12) 渡辺憲司 (1997) 『近世大名文芸圏研究』 八木書店
- 13) 太陽コレクション城下町古地図散歩 5 (1997) 『萩・津和野 山陰・近畿 [2] の城下町』 平凡社
- 14) 歴史群像名城シリーズ 14 (1997) 『萩城 毛利氏築城の掉尾』 学習研究社
- 15) 松浦友久編 (1999) 『漢詩の事典』 大修館書店
- 16) 児玉幸多編 (2003) 『くずし字解読事典 普及版』 東京堂出版
- 17) 歴史群像シリーズよみがえる日本の城 6 (2004) 『萩城』 学習研究社
- 18) 懐恩講 (2005) 『阿川毛利の歴代』 (非売品 再版)
- 19) 小和田哲男監修 (2005) 『日本の城』 小学館
- 20) 樹下明紀監修 (2006) 『図説 萩・長門の歴史』 郷土出版社
- 21) 土原歴史散策ぶらぶら通り委員会編 (2008) 『土原歴史散策』 (非売品)
- 22) 山口県編集 (2010) 『山口県史 史料編 近世 5』 山口県
- 23) 堀川貴司 (2010) 『書誌学入門—古典籍を見る・知る・読む』 勉誠出版
- 24) 高橋智 (2010) 『書誌学のすすめ』 東方書店
- 25) 山田稔 (2011) 『絵図で見る 萩の街道』 (萩ものがたり Vol.31) 一般社団法人萩ものがたり
- 26) 河村一郎 (2013) 『萩藩主要役職者年表』 萩市立
- 27) 植木久行編 (2015) 『中国詩跡事典—漢詩の歌枕』 研文出版
- 以上